

松 山 大 学 論 集  
第 21 卷 第 2 号 抜 刷  
2 0 0 9 年 8 月 発 行

## 英米文学鳥類考：ツグミについて

榊 田 隆 宏

# 英米文学鳥類考：ツグミについて

榎 田 隆 宏

## 1

スズメ、ハト、カラス。この3種の鳥なら誰でも知っている。でもメジロやウグイスとなると、はや怪しくなる。それが証拠に「梅に鶯<sup>うぐいす</sup>」の絵を見て、「これがウグイスか。さすがに名鳥、実に色鮮やかで美しい」と我が友人たちが褒めそやす。何のことはない。「看板に偽りあり」の作為的彩色に、とんと気付いていないのである。それというのも、ウグイスは見た目には「たいへん地味な色」<sup>1)</sup>の鳥であり、それ故に「梅に鶯」の鶯は、いわゆる「鶯色」、つまり色鮮やかな黄緑色（メジロの背の色）で描かれている<sup>2)</sup>からである。

本邦の歳時記にも「目白と鶯を勘違いしている人が意外に多い」<sup>3)</sup>とある。でも昨今の実情から言えば、「意外に多い」のはウグイスはおろかメジロでさえ知らない人ではあるまいか。「野鳥の王者」であるウグイスやメジロでさえこの有り様だとすると、ツグミを知らない人が大半を占めたとしても何ら驚くには当たらない。

ところが英国の実情は、これとは全く異なるようである。英文学者で動植物にも詳しい在日英国人のピーター・ミルワード氏によれば、「つぐみは別名を *throstle* ともいい、小さな斑点のついた茶色の羽と夏に奏でる澄んだ歌声で、イングランド人なら誰もが知っている鳥である」<sup>4)</sup>という。というのも、「*thrush* は英国に一年中いる鳥であり、その歌も真夏を除いては一年中聞くことができる。*thrush* が待たれる春のシンボルになるのは、他の鳥に先がけて営巣する性質上、その巣や卵が人の目につきやすいためであろう。2月の末頃、木の芽も

まだ萌え出ぬ裸の木の上に高く作られた mistle thrush の巣や、カッコウ型の巣の中のスカイブルーの song thrush の卵は、もうすぐ春のくるのを告げるものとして人の心をなぐさめるものである<sup>5)</sup>からだ。

このように日・英の両国では、その知名度に違いがあるにせよ、ツグミという鳥は見た目には《体に斑点のある》、《鳴き声の美しい》鳥のようである。学者は「ツグミ属には、65種、一説では58種の鳥がいるが、体型や習性はみなよく似ている<sup>6)</sup>」と言う。この互いに「よく似ている」ツグミ類の中で、日本人に最も身近な鳥が「ツグミ」である。英名は dusky thrush。文字通りの意味は「浅黒ツグミ」。以下、他のツグミ類と区別するため、括弧を付して「ツグミ」とする。したがって、最初に、この鳥を取り上げ、その輪郭を今少し具体的にみてみたい。本邦の『野鳥ガイドブック』は、「ツグミ」について次のように述べている。

**ポイント** ムクドリ大で、冬、シベリアから群れで渡来する。胸を45度にそらせるようにとまる。雌雄同色だが、個体差が多い。

**特徴** 全長24cm。上面は暗褐色で、翼は栗色。眉斑<sup>びはん</sup>はクリーム色で太く、黒い顎線<sup>がくせん</sup>がある。下面は白く、黒い斑がある……鳴き声は、地鳴きがクイックイッ、またはクワックワッ。4月末、渡去前には、クロツグミに似た美しい声でさえずる。

**生態** シベリアで繁殖する。日本には、10月に飛来、初めは山地に多いが、11月には人里にも下りる。明るいところを好み、よく観察できる。木の実、昆虫、ミミズを食べる。まっすぐに飛ぶ……

**豆知識** ツグミは日本では冬鳥。繁殖地のシベリア地方に渡り去る前、4月末の天気の良い日などは木の梢でさえずることがある。しかし、秋から春にかけては、クイッ、クイッと鳴く程度。口をつむぐことからツグミと名付けられたらしい<sup>7)</sup>

この《ムクドリ大，雌雄同色，白い腹に黒い斑紋，美しい声》がツグミ類の多くに共通する一般的特徴であるが，中でも注目すべきは《美しい声》である。というのも，「一般にツグミ属の鳥は……種によって，地鳴きや囀りさえずの特徴は異なるが，全般的に似通っており，鳥類中の最も優れた歌い手にもひけをとらない<sup>8)</sup>程の鳴鳥めいちよう（美しい声で鳴く鳥；英語で言えば，songbirdやsongster）だからである。以上の点を踏まえた上で話を進めたい。

通常，英国でツグミ類と言えば，ウタツグミ [song thrush]，ヘブリデーズ諸島ウタツグミ [Hebridean song thrush]，ヤドリギツグミ [missel thrush]，ノハラツグミ [fieldfare]，クロウタドリ [blackbird]，クビワツグミ [ring-ouzel]，ワキアカツグミ [redwing] の8種<sup>9)</sup>中でも有名なのはクロウタドリ，ウタツグミ，ヤドリギツグミの3種である。

これに対して，我が国に分布するツグミ類も同じく8種。解説書によれば，その内分は「トラツグミ [White's thrush]，マミジロ [Siberian ground thrush]，クロツグミ [Japanese grey thrush]，アカハラ [red-bellied (brown) thrush]，アカコッコ [seven islands thrush] の5種が繁殖し，ツグミ [dusky thrush] とシロハラ [pale thrush] が冬鳥として渡ってくる。またマミチャジナイ [eye-browed thrush] が春秋に通過する<sup>10)</sup>という。この8種の中で「ツグミ」，クロツグミ，トラツグミの3種が有名。

とはいえ，英名が示すように，日・英で共通する同種のツグミは一つとしてない。でも見た目と鳴き声から言えば，ウタツグミは「ツグミ」に，またクロウタドリはクロツグミに良く似ている。だが後者のクロウタドリは，ナイチンゲール，ロビンと並んで「ヨーロッパの三鳴鳥<sup>11)</sup>」に入る別格の歌い手である。したがって，この鳥については別個に取り上げることにして，ここではウタツグミを中心に話を進める。

## 2

英国版の『野と森の鳥』 (*Birds of Field and Forest*) は，ウタツグミについ

て次のように述べている。英文の下に拙訳を記す。

### The song thrush

A general favourite is the song thrush, or throstle, not because of any marked sociability, but for its vigorous song, which continues all the year round, even after dusk. The bird can be seen in woodland, in hedgerows, and in shrubberies and gardens. It has a strong preference for inhabited districts. Some resident birds migrate in the autumn, but continental varieties replace them.

Like many songsters, it is not remarkable for its colouring; upper parts are olive-brown, under parts creamy-white, with blackish-brown spots. The female is smaller and paler beneath.

The song thrush can often be seen hopping about, head cocked, searching for worms, slugs and snails; the last are smashed open against boulders or wall. It is also fond of soft fruit and berries, but does not cause tremendous damage in the garden.

The song, delivered as a rule from cover, is loud and clear, made up of simple phrases, generally repeated. Browning, in his *Home thoughts from Abroad*, noted this peculiarity:

‘That’s the wise thrush; he sings each song twice over,  
Lest you should think he never could recapture  
The first fine careless rapture!’

The thrush also has great powers of mimicry, and can accurately reproduce the notes of the blackbird, nightingale and woodpecker.

The neat nest is made in a hedge, tree, bush, wall or shed, of grass, straw and twigs, with an inner layer of dung, mixed with saliva, and prepared to a hard consistency. Then it is lined with moss and wood chips. Four or five eggs are laid, varying in colour from blue to green, sometimes spotted black or reddish-brown, sometimes unmarked. Two or three broods may be reared, the young being fed by both parents, the older fledglings often helping

to feed the younger ones.

Other thrushes include the Hebridean song thrush, missel thrush, fieldfare, blackbird, ring-ouzel and redwing<sup>12)</sup>

(ウタツグミ、別名 throstle は、みんなに好かれる人気者である。その理由は、目立って人懐こいからではなく、活気に満ちた美声で囀るからだ。事実、歌声は一年中、しかも日が暮れてからも聞かれる。その姿は森林地や生垣の低木、それに灌木の植え込みや庭でも目にする事が出来る。人間の居住地が大好きなのだ。英国では留鳥 [季節的移動を行わず、一年中ほぼ一定の地域にすむ鳥]<sup>13)</sup> だが、秋には渡りをするものもいる。入れ替わりに大陸種がやって来る。

鳴鳥の多くがそうであるように、ウタツグミは見た目には地味である。体の上面は黄茶色、下面は乳白色で、黒みがかった茶色の斑点がある。雌は雄よりは小柄で、下面の色も薄い。

頭をそらし、両足を揃えてピョンピョン跳ねるように歩きながら、昆虫やミミズ、ナメクジ、カタツムリを探している姿をしばしば目にする事が出来る。カタツムリは、石や壁に打ちつけ、殻を壊してから中身を食べる。柔らかい果実やイチゴ類なども好物ではあるが、果樹園に甚大な被害を与えることはない。

一般に茂みの中で囀り、声は大きくて明瞭。単純な音句から成り、それを普通は繰り返して鳴く。この特性についてブラウニング (Robert Browning [1812-89]) は、その詩：「異国より故郷を思う」の中で次のように言及している。

「あの賢いツグミが歌う。一つ歌を再び繰り返して。

最初の美しい、気ままな有頂天の歓びを

再び繰り返すことが出来ぬものと

人に思い込まれぬために。』<sup>14)</sup>

この鳥は物真似の能力にも優れていて、クロウタドリやナイチンゲール、それにキツツキの鳴き声を正確に真似ることが出来る。

生垣、木、藪、壁、納屋などに小綺麗な巣を懸ける。巣材は草、藁、小枝など。巣の中間層は動物の糞ふんで作られているが、唾液と混ぜ合わされているため、堅牢な粘性の下地となっている。巣は更に苔と木片で内張りされている。1腹の卵数は4、5個。その色は青から緑、時には斑点のある黒や海老茶、時には無印と変化に富む。巣立つのは2、3羽。雛は雌雄の親鳥によって養われるが、1番子が2番子の給餌を手伝うのは良くあることである。

ツグミ類には、これ以外にヘブリディーズ諸島ウタツグミ、ヤドリギツグミ、ノハラツグミ、クロウタドリ、クビワツグミ、ワキアカツグミがある。)

ウタツグミの歌声について『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』は、「その名に恥じないさえずりを聞かせる……そのさえずりは、たいへん明るく、響きがよい……いくつかの音からなるモチーフを何回も続けるので、発声にたいへんリズムカルな調子が生まれる」<sup>15)</sup>と評している。ミルワード氏の言うツグミとは、このウタツグミのことであり、ツグミ類の中ではクロウタドリに次ぐ歌い手と称えられる。したがって、英国で一般に *thrush* と言えば、ウタツグミのことであり、この鳴鳥が詩人や文人の間で人気があるのも尤もである。

しかし、「英文学に *thrush* として登場する鳥はたいがい *song thrush* (ウタツグミ) か、*mistle thrush* (ヤドリギツグミ) のいずれかである」<sup>16)</sup> という指摘がある。だとすると、ここでヤドリギツグミについても見てみる必要がある。有り難いことに、英国版の『野と森の鳥』は、この鳥についても言及している。具体的に見てみよう。

## 3

## The missel thrush

The missel, or mistle thrush derives its name from a contraction of 'mistletoe', since it was popularly believed that it fed its young entirely on the berries of this plant. In fact, this thrush, larger than the song thrush, with fewer but larger spots on its breast and grayer upper parts, enjoys a much more varied diet, including insects, snails, berries and soft fruit. It has a challenging, almost bullying nature, and has been known to kill small birds for its young.

The bird can also be distinguished from the song thrush by its flight, which is powerful, with fast wing beats alternating with prolonged periods when the wings are closed, and often at great heights. Its song is also very individual, louder and more monotonous than that of its more renowned relative, and generally delivered from high in a tree. Though not exceptionally melodious, the song takes on a wild quality at times, and when alarmed, becomes a harsh, scolding scream. Small wonder that it is often known by the names of Screech Thrush and Rattle Thrush.

Nevertheless, this indefatigable bird will resort to song at all times of year, including deep winter, and in all weathers, no matter how unpleasant. This habit of singing in torrential rain and high wind has earned it the nickname of Storm Cock.

The missel thrush generally nests high in forks of trees or occasionally in bushes. The nest is large, made of twigs, grass, roots and moss, and lined with mud and fine grass. Four or five eggs are laid, greenish-blue to bluish-white, and spotted brown and lilac. Two broods are raised, and the parent birds are quite fearless in protecting their nest against marauders, whether crows, hawks, cats or humans.<sup>17)</sup>

(ヤドリギツグミの鳥名は「ヤドリギ」の短縮形に由来する。というのも、この鳥はもっぱらヤドリギの実で子育てをする、と一般に信じられていたからだ。事実、このツグミ——ウタツグミと比較すれば、体は大柄、胸

部の斑点は数が少なく大きい、体の上面は濃い灰色のヤドリギツグミ——の好物は、昆虫、カタツムリ、イチゴ類、柔らかい果実等々、ウタツグミよりは遙かに多種多様である。ほとんど脅しに近い挑戦的気性を有し、小鳥を殺して、その雛を食することで知られている。

ウタツグミと見分けが付く今一つの顕著な違いは、その力強い飛翔にある。つまり、翼を数回羽ばたいては体に付けたまま長く滑空し、また羽ばたくという飛び方を繰り返しつつ、しばしばかなり高い所を飛翔する。歌声も実に個性的で、より有名なウタツグミより声は大きくて単調、一般に高い樹木の中から発せられる。並外れた美声ではないが、時に野性的な音色を帯びる。でも驚いた時には、叱責するような耳障りな叫び声となる。そのため、しばしばスクリーチ・スラッシュ（金切り声ツグミ）とか、ラトル・スラッシュ（ガラガラツグミ）という別名で知られているのも何ら不思議ではない。

にもかかわらず、この疲れを知らないツグミは年がら年中、真冬であろうと、どんなに不快な天候であろうと、頓着せずに良く囀る。この土砂降りの雨や強風を物ともせず歌を歌う習性の故に、ストーム・コック（嵐の雄鳥）のニックネームを付けられている。

ヤドリギツグミは、一般に高い木の<sup>また</sup>又、時には藪の中にも営巣する。巣は大きく、小枝、草、根、苔から出来ていて、泥や細い草で内張りされている。1腹の卵数は4、5個。その色は緑がかった青から青みがかった白まであり、茶色とライラック色の斑点がある。巣立つ雛は2羽。親鳥たちは、襲撃者がカラス、タカ、ネコ、はたまた人間であれ、全く恐れを知らずに巣を守る。）

このヤドリギツグミの歌声を評して『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』は、「そのさえずりは、やや憂愁をおびるが美しい声である。たとえ天候が悪くても、冬の終わりになると、必ずその声がかかる。つがいは、12月の下

旬から形成されるが、テリトリの宣言は2月になってはじめて、その力強い鳴き声で行われる」<sup>18)</sup>と述べている。してみると、ヤドリギツグミもまた注目しに値する「美しい声」の鳥、と言えるのではあるまいか。

一方、我が国の「ツグミ」も「丸みのある美しい囀り」<sup>19)</sup>；「囀りは明るくすばらしい声で、キュウビイユ・キュルルルキイイーユ・ヒチリリリなど、長く続ける」<sup>20)</sup>という言葉が示すように、確かに声の美しい鳴き鳥である。にもかかわらず、英国のように人口に膾炙していないのは何故なのか？

#### 4

その第一の理由は、英国のウタツグミやヤドリギツグミが《留鳥》であるのに対して、本邦の「ツグミ」は《冬鳥》だからである。具体的に言えば、「ツグミ」は秋にシベリアから我が国に渡来して、春にはまたシベリアに帰る《渡り鳥》である。つまり、日本は単なる越冬地であって、繁殖地はシベリアなのだ。一般に野鳥の鳴き声は「地鳴き」(call note)と「囀り」(song)に大別されるが、「囀りは普通、繁殖期しか出されない」<sup>21)</sup>一方、地味で単調な地鳴きは、1年を通じて発せられる。ウグイスで言うなら、「ホーホケキョ」が囀り、「チャッ、チャッ」が地鳴きである。

専門家が言うように、晩秋ともなれば、「ツグミ」の姿が我が国の「都市部の公園や住宅地でもふつうに見られる」<sup>22)</sup>でも彼らが発するのは、地鳴きの「クイックイッ、またはクワックワッ」のみであり、その美しい囀りを聞かせるのは「春の渡去の頃」<sup>23)</sup>に限られる。しかも、その頻度は低く、「4月末の天気の良い日などは木の梢でさえすることがある」程度である。事実、解説書にも「さえずりが聞かれることは少ない」<sup>24)</sup>とある。というのも、「真正のわが国にさえずるツグミ類」は、人界を離れて高原に住まう「トラツグミ、マミジロ、クロツグミ、アカハラ」の四種<sup>25)</sup>に限られるからだ。ちなみに、「ツグミ」の季語は「秋」である。

加えて、「ツグミ」は「決して美しい色彩ではない」<sup>26)</sup>上に、「茂みに隠れて

鳴く」ためか、「内気象徴で、孤独な隠者にも擬せられる」<sup>27)</sup> 地味で目立たぬ鳥である。更に言うなら、「ツグミ」の歌声は、ウグイス（法法華経）やカッコウ（文字通りカッコウ）のように、聞きなし〔人間の言葉への置き換え〕が容易ではない。専門家も「ツグミの囀りを知る人は少ない」<sup>28)</sup> と言う。なお「ツグミ」の語源は、この鳥の地鳴きに由来するようである。これについては、吉田金彦編著『語源辞典：動物編』に以下のような詳しい説明がある。

『大言海』に「<sup>つぐ</sup>噤みの義。夏至の後、声無ければなり」とあるのによれば、口を開けずに黙っていることを表す動詞のツグム（噤）の名詞形ツグミというわけである。なお、考えると、方言にツギメ・ツグ・ツクシ・ツグシ・ツクロジ・ツグメ・ツングシ・ツングシなどの一群がある。これらはいずれも鳴き声（地鳴き）に由来していると思われる。これらのツク・ツグはもと鳴き声から出ている。ツグミもツグ（鳴き声）+ミと考えたい。ミはメの変化と考えれば矛盾はない。スズメは、古くはスズミでもあった。メは群れの略とする説が一般的である。ツグミの異名のツムギは、子音 g と m とが入れ替わったもの<sup>29)</sup>

我が国で「ツグミ」が軽視され、さほど人口に膾炙していない今一つの理由は、巷間では戦前まで数百年の長きに亘って「ツグミ」と言えば、即《生きた野の鳥》ではなく、《食肉》であったことである。それは「旅づかれつぐみ焼けしと起さるる」（皆吉爽雨）<sup>30)</sup> や「<sup>つぐみ</sup>鶉鍋とりし自在のはね上がる」（森田愛子）<sup>31)</sup> という俳句からも窺われる。付言すれば、ツグミにまつわる古諺に「鶉喜ばばケラが腹を立てる」<sup>32)</sup> があるが、これも古のツグミ猟に由来する。というのも、ミミズやケラを<sup>かき</sup>鉤に刺してツグミを捕る狩猟法があったからだ。ちなみに、諺の意味は「ツグミを捕らえるのに、ケラが餌としてつないでおかれた。怒っているケラを見て、ツグミが喜んで寄ってくる。一方の怒ることが他方の喜びとなる。利害の対立する関係のことをいう。」<sup>33)</sup>

『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』によると、「〔「ツグミ」は〕シベリアで繁殖し、秋になると日本にも渡ってくるものだが、石川、福井、富山、岐阜の諸県では、古来、かすみ網猟で大量のツグミを捕らえ、食用に供していた<sup>34)</sup>』という。その「狩猟数は多い年で400万羽以上<sup>35)</sup>』というから、想像を絶する。1991年よりカスミ網の販売や所持は禁止となっているが、昔のツグミ猟について小林清之助氏は次のように述べている。

ツグミという鳥は、なかなか肉の味がいい。大きさは、ムクドリくらいで、肉量もまずまずである。それが大挙して、一定のコースをやって来るのだから、人間が放って置くはずがない。戦前は、霞網を張って、大量にこれを捕った。その数は、毎年200万羽から300万に及んだ。昭和13年の農林省山林局発行の狩猟統計には、この年のツグミ捕獲数が2,361,302羽となっている……

霞網が禁止され、ツグミが狩猟鳥から非狩猟鳥に格上げされたのは、昭和22年のことだ。これは、当時のアメリカ占領軍の天然資源局野外生物科長、O.L.オースチン博士の勧めに従ったもので、徳川時代から数百年にわたって行われて来たツグミ猟は、ここにそのあとを断った…<sup>36)</sup>

更に、国松俊英氏は、遠藤公男氏の『ツグミたちの荒野』の内容を要約紹介して次のように述べている。

このような猟が始まったのは江戸時代で、加賀藩の武士が細い絹糸を使って天網<sup>てんあみ</sup>というものを編んだ。それがカスミ網の原形だという。天網を編んだ武士は、これを使ってツグミを一網打尽にすることを考えたのだ。加賀藩ではカスミ網猟のことを鳥構え<sup>とりがま</sup>といい、武士だけに許されたもので鍛錬を兼ねた猟だった……明治維新となり武士が失業すると、鳥構えの経験を生かしてツグミ猟をやり、客を呼んで商売をするようになっていった

のだった。こうしてカスミ網猟は、石川県から富山・岐阜・愛知・長野・福井と中部六県に広まっていった<sup>37)</sup>

## 5

「ツグミ猟禁止令」が出てから既に半世紀以上の歳月が過ぎ、今では《「ツグミ」＝食肉》という戦前の負のイメージが、大方の日本人から払拭されようとしている。これは誠に喜ばしいことであるが、ツグミ類の鳥が美味であることは、古今東西共通していたようである。英国の「マザーグース」に、それを窺わせる有名な「六ペンスの唄を歌おう」がある。

ただし、ここに登場するツグミはツグミ属の鳥ではあるにしても、クロウタドリ (blackbird) である。ちなみに、この唄はアメリカの児童文学作家ローラー・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder [1867-1957]) の作品にも登場し、主人公の開拓者の一家によって歌われている<sup>38)</sup> これを見ても、「六ペンスの唄を歌おう」が本家の英国では、いかに人口に膾炙していたかが分かる。以下紹介する。

‘Sing a song of sixpence’  
 Sing a song of sixpence,  
     A pocket full of rye ;  
 Four and twenty blackbirds,  
     Baked in a pie.

When the pie was opened,  
     The birds began to sing ;  
 Was not that a dainty dish,  
     To set before the king ?

The king was in his counting-house,  
     Counting out his money ;

The queen was in the parlour,  
Eating bread and honey.

The maid was in the garden,  
Hanging out the clothes,  
There came a little blackbird,  
And snapped off her nose.<sup>39)</sup>

「六ペンスの 唄を歌おう」  
六ペンスの うたをうたおう  
ポケットは むぎでいっぱい  
二十四わのくろつぐみ  
パイにやかれて

パイをあけたら  
うたいだす ことりたち  
おうさまに さしあげる  
しゃれた おりょうり？

おうさま おくらで  
おかねかんじょう  
おきさき おへやで  
はちみつパンを もぐもぐ

じょちゅうは にわで  
ほしもの ほしてる  
そこへつぐみが やってきて  
はなをぱちんと ついばんだ」<sup>40)</sup>

しかし、同じ「マザーグース」にツグミを称える唄で、更に有名なものがある。「誰がコマドリ殺したの？」（‘Who killed Cock Robin?’）である。この中でツグミは、次のように唄われている：「誰が賛美歌、歌うのか」（“Who’ll sing a psalm?”）／「それは私と、ツグミが言いました」（“I, said the Thrush.”）／「小枝の上に止まって」（“As she sat on a bush,”）／「私が賛美歌、歌いましょう」（“I’ll sing a psalm.”）<sup>41)</sup> さすがは英国、ツグミは只の鳥ではないようである。

ちなみに、アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』からツグミ (thrush) に関する主なものを列挙してみると、①「典型的な春の鳥」（“the typical bird of spring”）；②（春の鳥であるが故に）「愛」（“love”）；③（茂みで隠れて鳴くが故に）「内気」（“shyness”）；④（ブラウニングの詩：「異国より故郷を思う」から）「知恵」（“wisdom”）；⑤「古代ローマでは愛玩動物であり、美味しい食物となった」（“Rome: kept as a pet, and eaten as delicacy”）；⑦「童謡：ツグミはコマドリ Cock Robin の葬式で賛美歌を歌った」<sup>42)</sup>（“nursery-rhyme: the thrush sang the psalm at the funeral of Cock Robin”）<sup>43)</sup> 等々がある。

と見てくれば、《ツグミとは如何なる鳥なのか》一通り明らかとなった。それを踏まえた上で、西洋の文芸に登場するツグミについて見てみよう。

## 6

先ずヘレニズムの世界から。ツグミは「ギリシア・ローマ神話」には登場していないようだ。でも『イソップ寓話集』には、「ツグミと鳥刺」の話がある。その内容は以下の通りである。

### The Thrush and the Fowler

A THRUSH was feeding on a myrtle-tree and did not move from it because its berries were so delicious. A Fowler observed her staying so long in one spot, and having well bird-limed his reeds, caught her. The Thrush, being at the point of death, exclaimed, “O foolish creature that I am! For the sake of a little pleasant food I have deprived myself of my life.”<sup>44)</sup>

「鶇つぐみがミルテの繁みで餌ついでを啄み、その実の甘さに飛び去りかねていた。すると鳥刺とりさしが、その場を離れられない鶇ついでを見てとって、鳥綱とりもちで捕まえた。鶇は殺される間際にあって言うには、  
 くああ、情けない。命かての糧かての甘さのために、命を奪われるとは  
 贅沢ゆえに身を減ぼす救いようのない人に、この話はぴったりだ。」<sup>45)</sup>

ここではツグミが「愚か者」として登場している。これは、前述のブラウニングやアト・ド・フリースの定義（「賢いツグミ」；「知恵を表す」）に反する。でもイソップの動物寓話集とは、何よりも人間の性さがを風刺して、人に教訓を教えるものだ。黙って看過することにした。ちなみに、ツグミはヘブライズムの世界とは無縁のようで、『聖書』には登場していない。

では舞台を英国に移して、この国の文学に登場するツグミについて見てみよう。最初に、シェイクスピアの作品から。登場場面は3カ所：『夏の夜の夢』（3幕1場）、『ヴェニス商人』（1幕2場）、『冬物語』（4幕3場）である。『夏の夜の夢』から見てみる。機屋はたやのボトムは歌う。

The ousel cock so black of hue,  
 With orange-tawny bill,  
 The throstle with his note so true,  
 The wren with little quill, —  
 「色真黒でくちばしは  
 焦げ茶色した黒ツグミ、  
 歌の上手な歌ツグミ、  
 か細い喉のミソサザイ ——」<sup>46)</sup>

見ての通り、《ウタツグミ＝歌の上手な鳥》である。では次に、『ヴェニス商人』を見てみる。婿選びに当たり、ポーシャはフランスの貴族ル・ボンを評

して侍女のネリッサに言う。

... he is every man in no man ;  
 if a throstle sing, he falls straight a cap'ring :  
 he will fence with his own shadow :  
 if I should marry him, I should marry twenty husbands.

「人間とは名ばかりの人真似猿、  
 ツグミが歌えばすぐに踊り出す、  
 鏡に映る自分を相手に剣を抜きかねない。

あんな人と結婚したら、何十人も旦那様をもたされたようなものよ。」<sup>47)</sup>

ここで「歌の上手なウタツグミ」の声音は、人を踊らせる程に「たいへん明るく、響きがよい」<sup>48)</sup> ことが分かる。「ウタツグミの歌は、いくつかの音からなるモチーフを何回も続けるので、発声にたいへんリズムミカルな調子が生まれる」という指摘は既に見た。ウタツグミは、大変明るい美声で歌う鳴鳥なのである。と同時に、既に見たように、物真似の上手な鳥でもあることを忘れてはなるまい。では最後に、『冬物語』を見てみよう。ごろつきのオートリカスは唄う。

The lark, that tirra-lyra chants,  
 With heigh ! with heigh ! the thrush and the jay,  
 Are summer songs for me and my aunts,  
 While we lie tumbling in the hay.

「ヒバリがティラリラさえずれば、  
 ヘイ、ホー、ツグミにカケスたち、  
 干し草枕に娘っ子と  
 おねんねするのもいいじゃないか。」<sup>49)</sup>

ここでもまたツグミは、人を楽しく酔わせる明るい鳴鳥であり、ヒバリに匹敵する《春の名鳥》として登場している。アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』が、「ツグミ＝典型的な春の鳥」を筆頭に挙げているのも宜なるかなである。英国では「ナイチンゲールやヒバリのいずれにも劣らぬほど歌声では評判高いウタツグミ」<sup>50)</sup> (“Thrush... a bird as much famed for song as either the nightingale or the lark”)<sup>51)</sup> である。なのに、シェイクスピアの全作品の中でツグミが登場する場面は、上記の3例のみである。これは「いささか奇妙」<sup>52)</sup> (“somewhat singular”)<sup>53)</sup> という他はない。

## 7

次に、英詩に登場するツグミについて見てみよう。農民詩人ジョン・クレア (John Clare [1793-1864]) に「ツグミの巣」という美しい詩がある。

## ‘The Thrush’s Nest’

Within a thick and spreading hawthorn bush,  
 That overhung a mole-hill large and round,  
 I heard from morn to morn a merry thrush  
 Sing hymns to sunrise, and I drank the sound  
 With joy ; and, often an intruding guest,  
 I watched her secret toils from day to day—  
 How true she warped the moss, to form a nest,  
 And modelled it within with wood and clay ;  
 And by and by, like heath-bells gilt with dew,  
 There lay her shining eggs, as bright as flowers,  
 Ink-spotted over shells of greeny blue ;  
 And there I witnessed in the sunny hours  
 A brood of nature’s minstrels chirp and fly,  
 Glad as that sunshine and the laughing sky.<sup>54)</sup>  
 「大きくて丸いもぐら塚の上におお掩いかかった、

茂りひろがるサンザシの繁みの中で  
 一羽のツグミがいく朝もさしのぼる朝日に向かって  
 楽しそうに賛歌を歌うのを聞いた。わたしは嬉しくなって  
 うっとりとその歌に聞きいった。そして何度も押しかけの訪問客となって  
 いく日も雌鳥のひそかな営みを見守った。  
 いかに真剣に雌鳥は苔をたわめて巣を形づくり、  
 木片れや泥土をもって内部を巢型に作りあげたことか。  
 やがて露に光るヒースの鐘状花に似た  
 花のように明るい色で、青緑色の殻の全体に  
 黒色の斑点のある、光りかがやく卵が生まれた。  
 そして、太陽の照り輝く日に、わたしは其処で、  
 ひと腹の自然の薬師たちがチイチイ鳴いて飛ぶのを見た、  
 日光のように、また笑っている空のように喜んで。』<sup>55)</sup>

なんと幸せと喜びに満ちた早春賦であろうか。ツグミを唄った詩歌は色々あるにしても、これに勝るものは未だ知らない。ツグミを主人公として明るい春の自然と献身的な母性愛を背景に、新しい命の誕生を唄った感動的な詩である。でもクレアは、貧窮の故に発狂した薄幸の詩人である。その苦難の人生に思いを馳せながら、改めてこの詩を味読する時、万感胸に迫る。思うに、人の心を打つ作品とは泥中に咲く蓮のごときものなのであろうか。

ツグミが登場する早春賦と言えば、ウィリアム・ブレイク（William Blake [1757-1827]）にも春の到来を喜ぶ、ほのぼのとした詩がある。「こだま木壺するくさの草野はら原」である。その一部を紹介したい。

‘The Echoing Green’

The sun does arise,  
 And make happy the skies ;

The merry bells ring  
 To welcome the Spring ;  
 The skylark and thrush,  
 The birds of the bush,  
 Sing louder around  
 To the bells' cheerful sound ;  
 While our sports shall be seen  
 On the echoing green.<sup>56)</sup>

「日がのほり、  
 空は天気になってくる。  
 楽しい鐘が鳴りわたり、  
 春をよろこび迎えてる。  
 ヒバリも、ツグミも  
 しげみの小鳥も、  
 楽しい鐘の音につれて  
 ますます高く辺りで歌えば、  
 ほくらの遊びを見てごらん、  
 こだまするこの緑の野べに。」<sup>57)</sup>

なお、ブレイクはウタツグミの声音を「その歌声はウタツグミの如く甘美なり」(“Sweet his tongue as the thistle’s notes”)<sup>58)</sup>と「吟遊詩人の歌」(‘Minstrel’s Song’)の中で賛美している。この「春告げ鳥」の歌声を称える詩人は未だ他にも居る。聖職者詩人の G. M. ホプキンズ (Gerald Manley Hopkins [1844-89])である。彼は「春」の中で次のように唄う。

‘Spring’  
 NOTHING is so beautiful as spring—  
 When weeds, in wheels, shoot long and lovely and lush ;

Thrush's eggs look little low heavens, and thrush  
Through the echoing timber does so rinse and wring  
The ear, it strikes like lightnings to hear him sing,<sup>59)</sup>

(春ほど美しいものはない——

草は輪となり、美しくて青々とした長い芽を出す；)

「つぐみの卵はまるで小さな低い空のよう、またつぐみのさえずりが、それをこだまする立木を通り抜け、耳を洗い、耳を圧して絞り、その歌声を聞けば、まるで稲妻のように耳を打つ」<sup>60)</sup>

またスコットランドの小説家・詩人のサー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott [1771-1832]) も物語詩：『湖の麗人』(‘The Lady of the Lake’) の中で、ヒバリやクロウタドリと並んで、春の鳴鳥のツグミを称えている。

Invisible in flecked sky the lark sent clown her revelry :  
The blackbird and the speckled thrush  
Good-morrow gave from brake and bush ;  
In answer cooed the cushat dove

Her notes of peace and rest and love.<sup>61)</sup>

「うるこぐも鱗雲ひばりの流るる空に姿を隠して雲雀は  
歛喜こくどりの声を降り注ぎ、黒鳥 [クロウタドリ] と斑まだらつぐみ鶉は  
藪の中から朝の挨拶をおくり、  
山鳩はそれに応えて  
平和と安息と慈愛の歌を唄っている。」<sup>62)</sup>

以上4編の詩を通してツグミ賛美を見てきたが、英名・和名を問わず thrush (ツグミ) と名の付く鳥で最高の歌い手はウタツグミ (song thrush, or throstle) である。この第一級の鳴鳥に言及して、桂冠詩人のワーズワース (William Wordsworth [1770-1850]) とテニソン (Alfred Tennyson [1809-92]) は唄う。

最初に、ワーズワースの「発想の転換をこそ」(‘The Table Turned’) から。「書

を捨て、野に出て、自然に学べ」と呼びかける、この詩は我が国でもつとに有名である。1連と4連を紹介する。

Up! up! My friend, and quit your books ;  
Or surely you'll grow double :  
Up! up! My friend, and clear your books ;  
Why all this toil and trouble ?

「さあ、君、立ち上がるのだ！ 君の本を捨てるのだ！

さもないと、君の腰はほんとに曲がってしまうぞ。

立て、立ち上がるのだ！ もっと明るい顔をしたらどうだ。

なぜそんなに刻苦勉励して本を読むのだ？」

And hark! How blithe the throstle sings!

He, too, is no mean preacher :

Come forth into the light of things,

Let Nature be your Teacher.

「よく聴くのだ、<sup>つぐみ</sup> 鶇のあの爽快な鳴き声を！

あの鳥も深遠な聖職者なのだ。

万象の光輝燦然たる世界に出てくるがいい、

そして自然を師として仰ぐがいい！」<sup>63)</sup>

クロウタドリを初め、ツグミ類は押し並べて評判の鳴き鳥である。と同時に、「知恵を表す」「賢い」鳥でもある。そのことを改めて思い見るなら、詩人がクロウタドリを「深遠な聖職者」と称えているのも首肯できよう。

次に、同じく桂冠詩人のテニソンに「ウタツグミ」(‘The Throstle’) という詩がある。英国版の『野と森の鳥』で見たように、この鳥の歌声は「単純な音句から成り、それを普通は繰り返して鳴く」を特徴とするが、テニソンの詩はその点を良く押さえている。

“Summer is coming, summer is coming.  
 I know it, I know it, I know it.  
 Light again, leaf again, life again, love again,”  
 Yes, my wild little Poet.

Sing the new year in under the blue,  
 Last year you sang it as gladly.  
 “New, new, new, new !” Is it then so new  
 That you should carol so madly ?

“Love again, song again, nest again, young again,”  
 Never a prophet so crazy !  
 And hardly a daisy as yet, little friend,  
 See, there is hardly a daisy.

“Here again, here, here, here, happy year !”  
 O warble unhidden, unbidden !  
 Summer is coming, is coming, my dear,  
 And all the winters are hidden.<sup>64)</sup>

(「夏が来る，夏が来る。  
 もうすぐ，もうすぐ，もうすぐだ。  
 今に来る，来る，光に青葉，今に来る，来る，命に愛。」  
 その通りだよ，可愛い野鳥の歌姫さん。

来る夏を青い空の下で歌い迎えよ，  
 去年と同じように嬉々として。  
 「新し，新し，新し，新し！」  
 そんなに歡喜に溢れて歌うほど，来る夏は新しいのかい？

「今に来る，来る，愛に歌，今に来る，来る，新居に雛鳥。」

これ程に狂おしい予言者は、かつて居ただろうか！  
 可愛い我が友よ、ヒナギクは未だだよ。  
 ほら見てごらん、咲いてもいないだろう。

「ほら、ほら、ほら、今に来る、来る、幸せな夏が来る！」  
 ああ、非の打ち所のない自由な歌声であることか！  
 お前の言う通り、夏が来る、来る、もうすぐ来る。  
 さすれば、冬は跡形もなく退散だ。）

以上6編の詩を通読すると、ふと中学時代に習ったロバート・ブラウニングの詩：「春の朝」<sup>65)</sup>を想い出す。でも、ツグミの登場する詩は明るいものばかりではない。次に紹介する二つの詩：ワーズワースの「哀れなスーザンの夢想」とテニソンの「追憶の歌」は、哀愁や悲しみに満ちたものである。

## 8

最初に、「哀れなスーザンの夢想」から。この詩は人工の大都市ロンドンに住む田舎娘のスーザンが、街角に懸かる鳥籠の中で野鳥のツグミが声高に鳴くのを聞いて、望郷の念に捉われ、懐かしい故郷を夢想する、という内容である。全文紹介する。

‘The Reverie of Poor Susan’

At the corner of Wood Street, when daylight appears,  
 Hangs a Thrush that sings loud, it has sung for three years :  
 Poor Susan has passed by the spot, and has heard  
 In the silence of morning the song of the bird.

‘Tis a note of enchantment ; what ails her ? She sees  
 A mountain ascending, a vision of trees ;

Bright volumes of vapour through Lothbury glide,  
And a river flows on through the vale of Cheapside.

Green pastures she views in the midst of the dale,  
Down which she so often has tripped with her pail ;  
And a single small cottage, a nest like a dove's,  
The one only dwelling on earth that she loves.

She looks, and her heart is in heaven : but they fade,  
The mist and the river, the hill and the shade ;  
The stream will not flow, and the hill will not rise,  
And the colours have all passed away from her eyes !<sup>66)</sup>

「日光のさすころ、ウッド街のまがり<sup>かど</sup>角に、  
籠<sup>かご</sup>の鶉<sup>つぐみ</sup>が声高く鳴いた。三とせも歌いつづけて来た。  
哀れなスーザンはそこを通り過ぎて、  
朝まだきの静けさの中に、それを聞いた。

魅力をもつ歌声なのに、何が彼女を悩ますのだろう。  
彼女の瞳<sup>ひとみ</sup>にはそびゆる山と樹々のまほろしが浮かび、  
雲霧<sup>うんむ</sup>の輝く渦巻<sup>うずまき</sup>はロスベリ<sup>ただよ</sup>を漂い、  
チープサイドの谷間には河が走っている。

彼女が、たびたび、牛乳桶<sup>おけ</sup>をもっておりた  
緑の牧場<sup>まきば</sup>が谷の真ん中に見え、  
鳩の巣のような一つの小さな小屋<sup>こや</sup>が見える、  
それは彼女の好きなこの世のただ一つの住家<sup>すみか</sup>。

これを眺めるあいだ、彼女の心は天国にある。  
しかしやがて霞<sup>かすみ</sup>も河も、丘も樹陰<sup>こかげ</sup>も消え、

小川は流れず、丘はそびえず、  
さまざまな色彩はすべて彼女の瞳から消え去った。』<sup>67)</sup>

解説によれば、この詩は「1797年の作。春の朝ロンドンの街路にかかっている籠の小鳥の声により思いついたものといわれる。〈ウッド街〉、〈チープサイド〉、〈ロスベリ〉はいずれもロンドンの街の名で、これらはスーザンには山間や谷のように見えたのである」<sup>68)</sup>という。それにしても、「すべて世は事も無し」<sup>69)</sup>という「春の朝」とは何という違いであろうか。

次に紹介するのは、今は亡き無二の親友アーサー・ヘンリー・ハラムを悼むテニソンの「追憶の歌」(‘In Memorial’)である。その一部を紹介する。

When rosy plumelets tuft the larch,  
And rarely pipes the mounted thrush ;  
Or underneath the barren bush  
Flits by the sea-blue bird of March ;

Come, wear the form by which I know  
Thy spirit in time among thy peers ;  
The hope of unaccomplish'd years  
Be large and lucid round thy brow.<sup>70)</sup>

「産毛のような赤い新芽が<sup>からまつ</sup> ふさふさと落葉松を飾る時、  
梢の鶉が<sup>つぐみ</sup> きれいな声で囀る時、  
まだ葉の出ない茂みの枝をくぐり抜け、  
三月の鳥、あの海のように碧い翡翠が<sup>かわせみ</sup> 飛びまわる時、

亡友よ 帰ってくれないか、  
一緒に地上で暮らした頃の もとの姿で帰ってきてくれ。  
地上では、とうと<sup>と</sup>遠げなかった希望の光を、

大きな澄んだ後光ごこうの様に、おまえの額に捲いてきてくれ。』<sup>71)</sup>

詩の内容はともかくとして、以上見てきた英文学に登場するツグミのイメージは全て美声で囀る「典型的な春の鳥」である。英詩はこれ位にして他の作品を見てみよう。

## 9

最初に、博物学者のギルバート・ホワイト (Gilbert White [1720-93]) を見てみよう。『セルボーンの博物誌』 (*The Natural History of Selbourne*) の中に、美声の鳴鳥ツグミとその歌声の時期に言及した次の文がある。

Many birds which become silent about Midsummer reassume their notes again in September; as the thrush, blackbird, woodlark, willow-wren, etc; hence August is by much the most mute month, the spring, summer, and autumn through. Are birds induced to sing again because the temperament of autumn resembles that of springs? <sup>72)</sup>

「ツグミや、クロウタドリや、モリヒバリや、ムシクイなどのように、真夏のころには鳴きやめてしまう多くの鳥が、9月に入るとまた鳴きはじめます。ですから、春夏秋を通じて、8月は、一番鳥の声を聞かぬ月です。秋の陽気は、春の陽気に似ているので、また歌心を誘われるのでしょうか。』<sup>73)</sup>

ここで言うツグミとはウタツグミのことと思われるが、この鳥に関してホワイトは「2月に鳴き始め、ずっと8月まで、秋には再び鳴き始める」<sup>74)</sup> (“In February and on to August, reassume their song in autumn”)<sup>75)</sup> と指摘している。いずれにしても英国では、ツグミの美しい歌声は、春のみならず、秋や冬の最なか中でも聞けそうである。だとすると、ツグミが英国で抜群の人気を誇るのも尤もである。

次に、同じく博物学者の W. H. ハドソン (William Henry Hudson [1841-1922])

を見てみたい。彼はアルゼンチンのパンパス [南米南部, 特にアルゼンチンに広がる樹木のない大草原]<sup>76)</sup> で生まれ育ち, 後に父祖の地, 英国に帰化した特異な人である。別名「鳥の詩人」とも称えられ, 「鳥と言えば W. H. ハドソン, W. H. ハドソンと言えば鳥」だ。というのも, 彼を抜きにして, 鳥と文学は語れぬからである。

この W. H. ハドソンが格別に愛した鳥, それがツグミ類である。それは『鳥たちをめぐる冒険』(*Adventures among Birds*) の中で述べている次の言葉: ①「ツグミ類は, 発声器官の発達という面であらゆる鳥類中, 最高の段階に達している。またその分布は世界中に拡がり, 種類は 70 種におよぶ。鳥, その中でもわが家の〈庭つぐみ〉をとくに愛し, かつ世界中を見てまわりたいと思っているさすらいの英国人にとって, これ以上心をそそられる問題があるだろうか」<sup>77)</sup> (“In the development of their vocal organs they stand highest among birds, and they have a world-wide distribution, numbering about seventy species. What more fascinating object in life for a wandering Englishman who desires to see all lands, who loves birds and above all others the ‘garden-ouzel’ of his home.”)<sup>78)</sup>; ②「ツグミ科の鳥はどれも私にとって好ましいものばかり」<sup>79)</sup> (“All of this family are dear to me”)<sup>80)</sup> を見れば明らかである。

その「ツグミ類の中で W. H. ハドソンが最も愛する鳥, それがワキアカツグミである」 (“I love the redwing more.”)<sup>81)</sup> その理由として, 彼は「見た目の魅力」と「籠の鳥ではないこと」を挙げている。当人の言葉で言えば, ①「姿かたちと言ひ, 羽色といい, ワキアカツグミはツグミ類中で最も魅力的な鳥だと思う」<sup>82)</sup> (“He [redwing] is, I think, the most charming of the thrushes, both in shape and colouring.”)<sup>83)</sup>; ②「この鳥には<sup>はつらつ</sup>澁瀾とした野性がある。一つにはこの鳥が人に飼われないこと, したがって鳥の品位を傷つけるようなイメージや連想が何もないことがあるからかもしれない」<sup>84)</sup> (“There is a wildness, a freshness, in the feeling he gives me which may be partly due to the fact that he is not a cage-bird, that, on this account, there are no degrading images and

associations connected with this species.”)<sup>85)</sup>である。

「野の鳥は野に」を己の第一信条とする、W. H. ハドソンらしい文章である。だが、理由はこれだけではない。更に続けて彼は次のように言う。

All the images called up by the redwing, the sight or sound or thought of him, are of rural winter scenes, and are pleasing, especially those of the evening gatherings of redwings in copse or shrubbery. . . . In my case there are still other associations, for it happens that the soft musical chirp of the redwing reminds me of vividly of other birds which have a sound resembling it, birds that were dear to me in my boyhood and youth ; one a true thrush, another the social military starling of the grassy pampas and Patagonia.<sup>86)</sup>

「さてワキアカツグミの優しい音楽的な声音は、少年から青年時代にかけて親しんだ、これとよく似た声の鳥を鮮やかに思い出させるのである。一つは真のツグミ、もう一つは草深いパンパスとパタゴニアの社会性に富むムネアカマキバドリである。」<sup>87)</sup>

血は英国人ではあっても、W. H. ハドソンの第一の祖国はアルゼンチンのパンパスである。後年、この地を偲んで著した『はるかな国 遠い昔』(*Far Away and Long Ago*) [1918] は、彼の名著として我が国でもつとに有名である。更にW. H. ハドソンは『鳥たちをめぐる冒険』の中で、英国では「名前で知られているだけ」<sup>88)</sup> (“known only by name”)<sup>89)</sup> のクビワツグミを取り上げ、その美声の特質について次のように述べている。

The sound has intrinsic beauty, but its charm is mainly due to the place you hear it in, the wildness and solitude of the rocky glens or the mountain side. . . . As in other songsters, the ring-ouzel lowers his voice when approached by a man or when watched ; when singing freely the voice carries far, and may be heard distinctly from the opposite side of a glen three or four hundred yards wide, and refined by distance it has then a beautiful bell-like quality.<sup>90)</sup>

「クビワツグミの声はもちろんそれ自身でも美しいのだが、その魅力には聞く場所、つまり岩がちの峡谷や山の中腹など、荒涼こうりょうと幽寂ゆうじやくの気配が大ききものをいつている……他の歌手と同様に、クビワツグミも人が近づいたり見たりしているときには声を低める。しかし邪魔するものがないときには、囀りは遠くまでとどき、谷を隔てて3、4百メートル向こうの山腹にいてもはっきりと聞き取れた。離れているために一層純化された、美しい、鐘の音に似た音色だった。」<sup>91)</sup>

以上で博物学はお仕舞いにして、小説と児童文学を見てみよう。

## 10

最初に、女流小説家ジョージ・エリオット (George Eliot [1819-80]) の『サイラス・マーナー』(*Silas Marner*)から。登場人物のウインスロップ夫婦には、歌の上手な末っ子エアロンがいる。夫婦はそれが大の自慢で、それぞれ次のように言っている。①は父親ベン、②は母親ドリーの台詞である。

① “It’s a nat’ral gift. There’s my little lad Aaron, he’s got a gift—he can sing a tune off straight, like a throstle.”

「そりゃ生まれついで才なんだよ。うちの小坊主のエアロンのやつも才を持っていますぜ。あの子は、つぐみのように、節まわしをすらすら歌ってのけるんだからね。」<sup>92)</sup>

② “And he’s got a voice like a bird—you wouldn’t think,” Dolly went on; “he can sing a Christmas carril as his father’s taught him; and I take it for a token as he’ll come to good, as he can learn the good tunes so quick. Come, Aaron, stan’ up and sing the carril to Master Marner, come.”<sup>93)</sup>

「<それにこの子は、小鳥のような声をしてるのですよ。ほんとですよ>と、ドリーはいいつけた。<この子は、父親が教えたとおり、降誕祭うたの頌歌

を歌えるんですよ。わたしゃ、それがこの子が良い者になるしるしだと思っているんですがね。善い歌をすぐに覚えてしまうなんてね。さあ、エアロン、立ってマーナーさんに、唱歌を歌ってあげなさい、さあ。>]<sup>94)</sup>

と見てくれば、英国では一般庶民の間でも（ウタ）ツグミが名実ともに第一級の鳴鳥と見なされているのが分かる。「小鳥のような声」とは何よりも《美声》のことであり、その美声を代表する名鳥が（ウタ）ツグミという訳である。更に言えば、「善い歌をすぐに覚えてしまう」という台詞は、ウタツグミの特質と無縁ではない。というのも、「この鳥は物真似の能力にも優れていて、クロウタドリやナイチンゲールやキツツキの鳴き声を正確に真似ることが出来る」からだ。

このような誉れ高い名鳥であるからこそ、ツグミは児童文学では「善玉」として登場している。その作品は、「善玉」と「悪玉」との壮大な戦いを描く幻想的な冒険物語、トールキン（J. R. R. Tolkien [1892-1973]）の『ホビットの冒険』（*The Hobbit, or There and Back Again*）である。物語の中でツグミとオオガラスは、「善玉」の主人公たちを助ける脇役として登場し、最終的に彼らを勝利へと導く。

この2種の鳥について、『ホビットの冒険』は次のように述べている：「ツグミは、良い鳥、人なつこい鳥……長生きの、魔力のある鳥」<sup>95)</sup> (“The thrushes are good and friendly . . . a long-lived magical race”)<sup>96)</sup> で、「大ガラスたちは、たいへん長生きだ。物覚えもいい。また大ガラスは、その知恵や教えを、子どもに伝えてゆく」<sup>97)</sup> (“They [ravens] live many a year, and their memories are long, and they hand on their wisdom to their children.”)<sup>98)</sup> 一読して自明の如く、ツグミは間違いもなく《吉鳥》である。と同時に、「長生き」の故に、オオガラスと同様「知恵」を有する鳥でもある。ブラウニングが「賢いツグミ」と称えるのも宜なるかなである。

## 11

では舞台をアメリカに移して、この国の詩歌に登場するツグミ類について見てみよう。最初に取り上げるのは、ホイットマンの三つの詩、①「ポーノマクをあとして」；②「先頃ライラックの花が前庭に咲いたとき」；③「朝がきてさまよいながら」である。

## ① ‘Starting from Paumanok’

Having studied the mocking-bird’s tones and the flight of the mountain-hawk,  
And heard at dawn the unrivall’d one, the hermit thrush from the swamp-  
cedars,

Solitary, singing in the West, I strike up for a New World.<sup>99)</sup>

「ものまね鳥の鳴き声に耳を傾け山鷹の飛ぶさまにつくづくと見入り、  
夜明けになれば無類の歌い手、湿地の杉林から現れる隠者つぐみ [チャイ  
ロコツグミ] の声を聞き終えて、  
ただひとり、西部に歌声を響かせながら、僕は〈新しい世界〉のために歌  
い始める。」<sup>100)</sup>

## ② ‘When Lilacs Last in the Dooryard Bloom’d’

In the swamp in secluded recesses,  
A shy and hidden bird is warbling a song.

Solitary the thrush,  
The hermit withdrawn to himself, avoiding the settlements,  
Sings by himself a song.<sup>101)</sup>

「ひっそりと静まりかえった沼地のなかで、  
姿も見せぬ内気な鳥が歌を囀っているところ。

ひとりぼっちでこのつぐみ、

人里を避け、おのれひとりで引きこもるこの隠者、  
聞かせる相手もなしに今ここに歌を贈る。』<sup>102)</sup>

③ ‘Wandering at Morn’

Wandering at morn,  
Emerging from the night from gloomy thoughts, thee in my thoughts,  
Yearning for thee harmonious Union ! thee, singing bird divine !  
Thee coil'd in evil times my country, with craft and black dismay, with every  
meanness, treason thrust upon thee,  
This common marvel I beheld—the parent thrush I watch'd feeding its young,  
The singing thrush whose tones of joy and faith ecstatic,  
Fail not to certify and cheer my soul.<sup>103)</sup>

「朝がきてさまよいながら、  
夜の中から陰気な想念からのがれ出て、今はあなたのことを思い、  
あなたを慕い、渾然たる〈連邦〉よ、あなたを、神聖な歌い鳥よ、  
策略と陰険な狼狽、卑劣、裏切りの一切を押しつけられ、災いの時代にま  
きこまれたあなた、わたしの国よ、  
わたしはごくありふれたこの驚異を眺めた——親つぐみが雛に餌をやる  
のを見守っていた、  
歌声を聞けば、その恍惚たる歓喜と信念の調子のゆえに、  
きつとわたしの魂に確信と歓びを与えてくれるつぐみの姿を。』<sup>104)</sup>

ここに登場するツグミは、見た目には「内気」で孤独な「隠者」であるにしても、鳴き鳥としては非の打ち所がない名鳥、「無類の歌い手」である。最後の2行は、その証左である。たとえ種が異なろうと、ツグミはツグミ。この鳥はアメリカでも、その無類の美声の故に、別格の吉鳥なのだ。この点に関しては誰も異論はあるまい。

次に、米国生まれの英国の詩人・批評家・劇作家 T. S. エリオット (T. S. Eliot

[1888-1965]) の作品を見てみよう。詩人はツグミに言及して次のように言う。

- ① 「最初の門を通して初めての世界へと、ひとつツグミに欺されたつもりで行ってみようか」<sup>105)</sup> (“Through the first gate, /Into our first world, shall we follow/The deception of the thrush?”)<sup>106)</sup> 『四つの四重奏曲』
- ② 「隠者ツグミ [チャイロコツグミ] の松林に鳴く」<sup>107)</sup> (“the hermit-thrush sings in the pine trees”)<sup>108)</sup> 『荒地』
- ③ 「霧をぬってなくツグミ [モリツグミ]」<sup>109)</sup> (“the woodthrush singing through the fog”)<sup>110)</sup> 「マリーナ」, 『妖精詩集』

ここに登場するツグミは、いずれも鳴き鳥としての役を演じているが、①の「ツグミの惑わし」については、「ツグミは現実と幻想の混同を企むが、そのことによって、この世での恩寵の使者となる」<sup>111)</sup> (“it tries to confound reality and illusion; but by doing so it becomes a messenger of grace in this world.”)<sup>112)</sup> との解説がある。見ての通り、T. S. エリオットの詩に登場するツグミも鳴鳥にして吉鳥である。ただし、①のツグミは英国産、②と③のツグミは米国産と、この帰化詩人の場合は、作品によって登場するツグミが二つの国に分かれるのが面白い。

ちなみに、北米で腹に斑点のあるツグミと言えば、チャイロコツグミ (hermit thrush), モリツグミ (wood thrush), オリーブチャツグミ (Swainson's thrush), ハイイロチャツグミ (grey-cheeked thrush), それにビリーチャツグミ (veery) がある<sup>113)</sup>。いずれも日・英のツグミと同種のものは一つとして生息していないが、この中で最も声が美しいのはチャイロコツグミで、モリツグミがこれに次ぐ<sup>114)</sup>。付言すれば、チャイロコツグミはバーモント州の州鳥である。これで詩はお仕舞いにして、他の文学作品を見てみよう。

## 12

文人であると同時に思想家・博物学者でもある H. D. ソローは、ツグミという鳥をどう見ているのであろうか。『ウォルデーデン：森の生活』の中にツグミに言及した以下のような文章がある。

① I found myself suddenly neighbor to the birds; not by having imprisoned one, but having caged myself near them. I was not only nearer to some of those which commonly frequent the garden and the orchard, but to those smaller and more thrilling songsters of the forest which never, or rarely, serenade a villager—the wood thrush, the veery, the scarlet tanager, the field sparrow, the whip-poor-will, and many others.<sup>115)</sup>

(私は、思いもよらず小鳥たちの隣人になったことを知った。彼らを籠に閉じ込めることによってではなく、言ってみれば、自分自身が小鳥たちの近くで籠に入ることによってである。私は普通、庭や果樹園を頻繁に訪ねて来る動物ばかりでなく、村人たちには決して、というより稀にしか、歌を聞かせない、動物よりは小柄で、与える感動も大きい森の歌い手たち——モリツグミ、ビリーチャツグミ、アカフウキンチョウ、ヒメドリ、ヨタカその他の多くの小鳥にも、より近くなったのである。)

② This small lake was of most value as a neighbor in the intervals of a gentle rain-storm in August, when, both air and water being perfectly still, but the sky overcast, mid-afternoon had all the serenity of evening, and the wood thrush sang around, and was heard from shore to shore.<sup>116)</sup>

(この小さな湖は、8月の穏やかな吹き降りの合間に、最も価値あるものとなった。その時は、空気も水も完全に静まる。空は雲で覆われるが、午後の3時前後は全く夕べのようにうららかで、モリツグミが周囲で囀り、その歌声が岸から岸へと聞こえてくるのであった。)

③ On the third or fourth of May I saw a loon in the pond, and during the first week of the month I heard the whip-poor-will, the brown thrasher, the veery, the wood pewee, the chewink, and other birds. I had heard the wood thrush long before.<sup>117)</sup>

(5月3日か4日、私は池の中にアビを見た。そして、同月の第1週にはヨタカ、チャイロツグミモドキ、ビリーチャツグミ、ニシモリタイランチョウ、トウヒチョウ、その他の鳥の声を聞いた。モリツグミは、ずっと前に聞いていた。)

どうやら H. D. ソローにとって、ツグミは一にも二にも《大きな感動を与えてくれる森の歌い手》であるようだ。ちなみに、アメリカ産ツグミの歌声について、『北米の野鳥ガイドブック』は次のように解説している。

①「モリツグミ」(wood thrush)＝一連のフルートのような声高の音句で、その後低いせんおん顫音の囀りが続く (“Song is a series of loud flute-like phrases, each followed by a softer guttural trill.”)<sup>118)</sup>

②「チャイロコツグミ」(hermit thrush)＝(繁殖場所以外で聞くことは稀であるが) 単一の高いフルートのような音色で、その後テンポの速い一連の強弱の囀りが続く；このパターンが他のピッチで繰り返される (“Song <seldom heard except on breeding ground> is a single high flute-like note followed by a rapid series of rising and falling notes ; this pattern repeated in other pitches.”)<sup>119)</sup>

③「ビリーチャツグミ」(veery)＝声は大きく、音階を下げながら、鈴を転がすように一連のテンポの速いフルートのような音色で囀る (“The loud song is a rolling series of rapid flute-like notes, dropping down the scale.”)<sup>120)</sup>

以上日・英・米の主なツグミについて色々見てきたが、日本人にとって今一つ見落としてはならないツグミがある。トラツグミ（虎鶯）である。

### 13

『広辞苑』によれば、トラツグミとは「スズメ目ヒタキ科の鳥。ツグミよりやや大形で、背面は黄褐色、腹面は黄白色で一面に三日月形の黒斑がある。日本・中国などで繁殖し、冬は南へ渡る。低山帯の林にすみ、夜くひいい、ひよお」と寂しい声で鳴く。ヌエ。ヌエシナイ」とある。

ここでヌエについて補足説明をしておく。同じく『広辞苑』によれば、ヌエとは①「トラツグミの異称」；②「源頼政が紫宸殿上で射取ったという伝説上の怪獣。頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎に、声はトラツグミに似ていたという」とある。②ではヌエを「怪獣」と記しているが、平凡社の『世界大百科事典』や小学館の『国語大辞典』によれば、「怪獣」ではなく「怪鳥」<sup>121)</sup>とある。学者によれば、「この怪物には名前がなく、本種 [トラツグミ] の古名であるヌエを怪物の名前とし、あたかもトラツグミが怪物であるかのように言い伝えられている事例が多い (内田清之助, 金井紫雲・1929)」<sup>122)</sup>という。

さて「トラツグミ」の説明で注目したいのは、「寂しい声で鳴く。ヌエ」である。したがって、トラツグミの《鳴き声》と《ヌエ》に力点を置いて、更に具体的に見てみたい。以下に解説を列挙する。

①「夜間、ヒーヒーと口笛に似た声でさえずる。曇りの日や暗い林では、日中でもさえずることがある。この気味の悪いさえずり声から、ヌエ、ヌエジナイと呼ばれることもある。」<sup>123)</sup>

②「薄暗い林にすみ、高音の<sup>・</sup>さ<sup>・</sup>え<sup>・</sup>ず<sup>・</sup>りはせず、ただ寂しくくひい<sup>・</sup>よ<sup>・</sup>ー」と口笛のような鳴き声で鳴く。昔、源頼政に射取られた怪獣“ぬえ”の声<sup>・</sup>がトラツグミの声に似ているというので、ぬえという別称もある。」<sup>124)</sup>

- ③「暗い林内にいることが多く、なかなか姿を見つけられない……夜や曇りの日に、口笛に似た寂しげな声でくヒー、ヒョー」とさえずる。  
 (名前の由来・文化) 体の模様からトラツグミとよばれる。鳴き声が薄気味悪いので、不吉な前ぶれとされてきた。平安時代に源頼政が鶴退治をしたという話があるが、く鶴とは、頭がサル、胴がタヌキ、尾はヘビ、手足はトラに似た想像上の動物のこと。別名のく鶴は、その動物の鳴き声にトラツグミの声が似ているとされたため。]<sup>125)</sup>
- ④「日中は殆ど鳴かないかわりに夜間はよく囀る。ピー、ツイーを一つ一つ切って鳴くので囀りとはとても思えない。深山などで聞くといささか気味悪い。」<sup>126)</sup>
- ⑤「夜間、気味の悪い金切り声で鳴く。源三位頼政が退治したヌエの正体は、この鳥であるといわれている。」<sup>127)</sup>
- ⑥「くヒー ヒョー」と長く引っ張る静かな声で囀るが、多く夜間であるために、人に恐ろしげな印象を与えることが多く、古人が鶴と呼んで恐れていた動物は、本種ではないかとの言伝えがあるほどだ。」<sup>128)</sup>

要約すれば、トラツグミとは昼でも「暗い林内」に居て姿を見せず、「夜間」や、どんよりとした「曇りの日」に、「恐ろしげな印象を与える」「気味の悪い金切り声で鳴く」鳥である。古人が怪物のヌエと呼んで恐れたのも首肯できる。この鳥の鳴き声に関して、俳人の堀口星眠は「地鳴きは精悍で楽しく、恋の囀りは嫋々とした感じでもあり、滅入るような趣もある」と述べた上で、次のように記している。

いつだったか新聞で、丹沢の方の山で、この鳥の恋の歌が金属音で、空

飛ぶ円盤ではないかと騒がれた顛末てんまつの記事があった。現代でもそうなのだから源三位頼政げんざん みよりまさの頃は怪獣ぬえ、鶴といわれて大騒ぎされたのは当然かもしれない。<sup>129)</sup>

この姿なき声の鳥「ヌエ」（トラツグミ）は、その際立つ声音の故に、昔から我が国では有名であったようだ。換言すれば、古人は、この鳥の姿を見ずとも、その鳴き声を聞いただけで、「あれはヌエ鳥だ」と即断することが出来たのである。それを示す証拠が『古事記』；八千矛神やちほこのかみ（後の大国主命おおくにぬしのみこと）の求婚歌にある。命みことは越こしの国ぬなかわひめに沼河比売を訪ね、次のように唄う。

嬢子をとめ [沼河比売] の 寝なすや板戸いたとを 押おそぶらひ 我が立たせれば 引ひ  
こづらひ 我が立たせれば 青山あおやまに 鶴ぬえは鳴きぬ さ野のつ鳥とり 雉きざしはとよむ  
庭にわつ鳥とり 鶏かけは鳴く<sup>130)</sup>

（大意）「おとめが寝ていらっしゃる家の板戸をしきりに押しゆすぶって、わたしが立っていると、しきりに引っぱって、わたしが立っていると、青山ぬえに鶴ぬえ鳥きざしが鳴きました。野のの鳥きざしの雉きざしも鳴き立てます。庭にわの鳥かけの鶏かけも鳴きます。」<sup>131)</sup>

この『古事記』のみならず『万葉集』にも、トラツグミは「ヌエ」の名前で登場している。その一つは柿本人麻呂の歌である。具体的に見てみよう。

[2031 番]：「よしゑやし 直ただならずとも ぬえ鳥どりの うら泣をき居りと 告  
げむ子もがも」<sup>132)</sup>

（大意）「たとえ直接には逢えなくても、ぬえ鳥の鳴くように忍び泣きしながら過ひとごしている、と伝えることのできる女が、近くに来てくれないものか。」<sup>133)</sup>

「ぬえ鳥」は「うら泣き」にかかる枕詞である。とすると、トラツグミの鳴き声は、古人には、何よりも「寂しげな」「もの悲しい印象」<sup>134)</sup>を与えたに違いない。この鳥が「寂しい声で鳴く」ことは既に見た。「長野県佐久地方では、本種〔トラツグミ〕のさえずりをくサビーシー、サビーシー」と聞きなしている<sup>135)</sup>のは、その証左である。「気味の悪いさえずり声」や「口笛に似た寂しげな声」。いずれにしてもトラツグミは、その鳴き声の故に、古来、程度の差はあれ《暗》のイメージ一色である。

それは、既に列挙した《トラツグミの鳴き声とヌエにまつわる解説》のみならず、「虎鶉減びの歌を枕辺に」(星眠)<sup>136)</sup>や「虎鶉累代の闇裏戸より」(木村蕪城)<sup>137)</sup>という現代俳句を見ても明らかである。我が国とは対照的に、英・米の文学がツグミ賛美に満ちているのは、彼我の違いの他に、ひょっとすると英・米両国には古来トラツグミが生息していないという事実も一因なのかもしれない。

## 14

とはいえ、トラツグミには《暗》のイメージを払拭するに足る強力な味方がいる。中西悟堂である。野鳥に精通した大御所であるだけに、その言葉には重みがある。氏はトラツグミの声を評価して、次のように言う。

(トラツグミの声は) 気味のわるい声であることに一致しているが、それとて人それぞれの主観しだいのもので、現に私のごときは、この静かで寂しい声が好きでたまらず、庭の禽舎に、この鳥とアカハラを同居させて、宵と明け方のトラツグミの声、朝のアカハラの声を楽しんだものだし、年ごとに行く軽井沢の星野温泉でも、夜ごとにこの声を室外に聞いて、どれだけ心を慰めているかしのれない。西多摩郡秋川べりの疎開先の仮寓では、夜明けごとに庭の隅の築山へきて鳴くトラツグミの声に、徹夜仕事のペンを投げては、「ああ、いいな」と口にするほど耳を傾けたものだ<sup>138)</sup>

この大御所の言う通り、モノに対する人間の好悪というものは、つまるところ、「人それぞれの主観しだい」に違いあるまい。それは、人間界の男女の仲を見ても明らかである。我が国の古人が恐れたヌエはギリシア神話のキマイラを連想させる。でも、もはやそんな怪物など誰一人信じない時代である。

だから万が一、夜の<sup>しじま</sup>静寂を破って「ヒー、ヒョー」という聞き慣れない鳴き声を聞いたとしても、何ら恐れる必要はない。相手は只の「夜の鳥」、トラツグミである。そう思って耳を傾けるなら、この鳥の「静かで寂しい声」は、必ずや我々の心に「慰め」を与えてくれるに違いない。現代人とは孤独な人種でもあり、それ故に人知れず「サビーシー、サビーシー」と鳴くトラツグミの歌声は、聴く者の心の琴線に触れるはずである。それにしても、自然破壊の所為であろうか、近年トラツグミの声を耳にすることは随分と少なくなった。「梅雨<sup>つゆ</sup>山家鶴啼き過ぎし簷<sup>のき</sup>ふかし」(春潮)<sup>39)</sup>今は昔の句である。

私事ではあるが、筆者は町中から郊外に転居したのを機に、庭に小さな餌台を備えている。そこに色んな野鳥がやって来る。特に冬場は数が多い。なかでも目立つのはスズメ、メジロ、ヒヨドリ、ハトである。時にはウグイスもやって来る。しかし、ここ数年来、毎日そつとやって来る、物静かで、見るからに品のある鳥がいる。早朝から日暮れまで幾度も庭の木陰に姿を現す。見た目や声は地味だが、実に心惹かれる鳥である。当初は「ツグミ」と勘違いしていた。

ところが、ある時、書斎の直ぐ前にある楓の木に止まっている姿を良く見ると、「ツグミ」に似てはいるが、腹には斑紋がない。窓から見つめる筆者を恐れもせず、しきりに木の枝に刺したミカンを啄んでいる。はてさて何の鳥だろうか。慌てて手元の図鑑で調べてみると、ツグミはツグミでもシロハラである。それ以来、毎日が楽しみとなった。その一挙手一投足が筆者をこの上なく魅了するからである。

本論は、このシロハラに触発され、「彼女」との日々の交流を楽しみながら書き上げたものである。もうすぐ冬も終わる。やがて私の愛しいシロハラも海の彼方の遠い北国へと旅立つ。その長い旅路の無事を心より祈って、来年の再

会を楽しみとしたい。

以上、日・英・米の文学作品に登場する主なツグミ類について色々と見てきたが、英・米と比べて我が国には、ツグミを唄う作品が少ない。これには種々の理由があるにせよ、我が国にもツグミ類の鳥は居るのである。中でも「ツグミ」やシロハラは、冬の間「都市部の公園や住宅地でもふつうに見られる」野鳥である。そのツグミを見るか見ないかは「人それぞれの」心一つであり、見れば、あなたの世界も変わる。先ずは「見る」ことである。老いて益々そう確信する毎日である。

「鶉鳴き<sup>かや</sup>萱原ひかり朝到る」(水原秋桜子)<sup>140)</sup>

#### 注

- 1) 山階鳥類研究所『おもしろくてためになる鳥の雑学辞典』（日本実業出版社，2004），p. 229.
- 2) 《ウグイス色＝メジロ色》の例として、和菓子の《うぐいす餅》がある。同上同ページ参照：「いまの“うぐいす餅”に使われている黄な粉の色は、人工着色したものでしょうか、明るい黄緑色をしています。これはウグイスの背の色ではなく、むしろメジロの背の色です」。
- 3) 長谷川草洲『鳥の俳句歳時記』（梅里書房，2003），p. 75.
- 4) ピーター・ミルワード『英文学のための動植物事典』中山理訳（大修館書店，1990），p. 271.
- 5) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』（大修館書店，1982），p. 45.
- 6) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』76号（朝日新聞社，1974），p. 6.
- 7) 志村英雄・山形則男・柚木修『バードウォッチングのための市街地・野山・水辺の鳥186種：野鳥ガイドブック』（永岡書店，1989），p. 22.
- 8) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』76号，p. 6.
- 9) 和名については、山階芳麿『世界鳥類和名辞典』（大学書林，1986）に従った。
- 10) 竹下信雄「ツグミ」、『世界大百科事典』（日立デジタル平凡社，CD-ROM版，1998）。以下『世界大百科事典』からの引用は全てこの版による。
- 11) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 別巻1：世界の鳥 ユーラシア／アフリカ』（小学館，1985），p. 6.

- 12) *Birds of Field and Forest*, illustrated by E. Demartini and introduced by O. Štěpánek (Spring Books, 1965), p. 102.
- 13) 『広辞苑』第5版(岩波書店, CD-ROM版, 1998)。以下『広辞苑』からの引用は全てこの版による。
- 14) 尾島庄太郎『新しい英詩の鑑賞』(北星堂書店, 1968), p. 94.
- 15) 『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』76号, p. 18.
- 16) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学:日・英・米の文学にあらわれる鳥』, p. 36.
- 17) *Birds of Field and Forest*, p. 106.
- 18) 『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』76号, p. 20.
- 19) 『野鳥の歳時記5 冬の鳥』(小学館, 1984), p. 142.
- 20) 中村登流・行田哲夫『野鳥検索小図鑑:山野の鳥』(講談社, 1984), p. 124.
- 21) 樋口広芳「地鳴き」, 平凡社『世界大百科事典』
- 22) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑:季語になる折々の鳥と虫204種』(成美堂出版, 2005), p. 210
- 23) 『野鳥の歳時記5 冬の鳥』, p. 142.
- 24) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑:鳴き声333(下)スズメ目』(小学館, 1996), p. 58.
- 25) 中西悟堂『定本野鳥歳時記3:鳥を語る』(春秋社, 1966), p. 41.
- 26) 『野鳥の歳時記5 冬の鳥』, p. 142.
- 27) 竹下信雄「ツグミ」, 平凡社『世界大百科事典』
- 28) 『野鳥の歳時記5 冬の鳥』, p. 142.
- 29) 吉田金彦編著『語源辞典:動物編』(東京堂出版, 2001), pp. 161-2.
- 30) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑:季語になる折々の鳥と虫204種』, p. 210
- 31) 稲畑汀子・飴山實監修・例句選『鳥獣虫魚歳時記:秋冬』(朝日新聞社, 2000), p. 33.
- 32) 国松俊英『鳥のことわざウォッチング』(河出文庫, 1999), p. 76.
- 33) 同上
- 34) 『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』76号, p. 14.
- 35) 荒俣宏『世界大博物図鑑 第4巻:[鳥類]』(平凡社, 1987), p. 316.
- 36) 小林清之助『鳥の歳時記』(パール新書, 1967), pp. 138-40.
- 37) 国松俊英『鳥のことわざウォッチング』, p. 78.
- 38) Cf. Laura Ingalls Wilder, *Little Town on the Prairie* (Harper Trophy Book, 1971), p. 105.
- 39) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, edited by Iona and Peter Opie (Oxford Univ. Press, 1997), pp. 470-1.
- 40) 谷川俊太郎訳・和田誠絵・平野敬一監修『マザー・グース②』(講談社文庫, 1981), pp. 18-9.
- 41) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p. 152.

- 42) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹, 荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福土久夫・山下主一郎・湯原剛共訳 (大修館書店, 1984), p. 638.
- 43) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Company, 1984), p. 465.
- 44) Aesop. Fables (Electronic Text Center, University of Virginia Library) の e-text による。
- 45) 『イソップ寓話集』中務哲郎訳 (岩波文庫, 1999), p. 83.
- 46) 『夏の夜の夢』小田島雄二訳, 『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』(新潮社, 2003)。以下シェイクスピア作品の原文・日本語訳は全てこの版による。
- 47) 小田島雄二訳
- 48) 『朝日＝ラルース世界動物百科 (鳥類)』76号, p. 18.
- 49) 小田島雄二訳
- 50) ジェイムズ・E・ハーティング『シェイクスピアの鳥類学』(博品社, 1996), p. 163.
- 51) James E. Harting, *The Ornithology of Shakespeare* (Gresham Books, 1978), p. 137.
- 52) ジェイムズ・E・ハーティング『シェイクスピアの鳥類学』, p. 163.
- 53) James E. Harting, *The Ornithology of Shakespeare*, p. 137.
- 54) ‘The Thrush’s Nest’ by John Clare (Project Gutenberg, 2005) の e-text による。
- 55) 川和高斌『英鳥詩選』(泰文堂, 昭和46), pp. 39-40.
- 56) *Poems by William Blake* (1911), selected with an introduction by Alice Meynell (Kessinger Publishing Rare Reprints, 2008), p. 71.
- 57) 大和資雄『英文学に於ける浪漫主義』(研究社, 1963), p. 52.
- 58) 同上, p. 44.
- 59) ‘Spring’ by Gerald Manley Hopkins (Project Gutenberg, 2007) の e-text による。
- 60) ビーター・ミルワード『英文学のための動植物事典』, p. 272.
- 61) *The Lady of the Lake* by Sir Walter Scott (Project Gutenberg, 2002) の e-text による。
- 62) スコット『湖の麗人』入江直祐訳 (岩波文庫, 2007), p. 80.
- 63) 平井正穂編『イギリス名詩選』(岩波文庫, 1991年), pp. 153-4.
- 64) ‘The Throstle’ by Alfred Tennyson (Humanities Web, 2008) の e-text による。
- 65) 山内義雄・矢野峰人編『上田敏訳詩集』(岩波書店, 1994), p. 77.
- 66) *Wordsworth’s Poems*, vol. 1, edited with an Introduction by Philip Wayne, M. A. (Everyman’s Library, 1955), p. 99.
- 67) 『ワーズワース詩集』田部重治選訳 (岩波文庫, 1969), pp. 9-10.
- 68) 同上, p. 217.
- 69) 山内義雄・矢野峰人編『上田敏訳詩集』, p. 77.
- 70) Alfred Tennyson, ‘In Memoriam’ (Bibliolife, second edition), p. 134.
- 71) テニソン『イン・メモリアム』入江直祐訳 (岩波文庫, 1994), pp. 170-1.

- 72) Gilbert White, *The Natural History of Selbourne* (Arrowsmith, 1924), pp. 94-5.
- 73) ギルバート・ホワイト『セルボーンの博物誌』山内義雄訳（講談社学術文庫, 1992）, p. 151.
- 74) 同上, p. 176.
- 75) Gilbert White, *The Natural History of Selbourne*, p. 110.
- 76) 小学館『ランダムハウス英語辞典』CD-ROM版。
- 77) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』黒田晶子訳（講談社, 1977）, p. 170.
- 78) William Henry Hudson, *Adventures among Birds* (J. M. Dent & Sons, 1951), p. 138.
- 79) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, p. 124.
- 80) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, p. 96.
- 81) 同上
- 82) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, p. 124.
- 83) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, p. 96.
- 84) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, p. 125.
- 85) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, p. 96.
- 86) 同上, pp. 96-7.
- 87) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, pp. 125-6.
- 88) 同上, p. 163.
- 89) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, p. 132.
- 90) 同上, p. 135.
- 91) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, p. 167.
- 92) ジョージ・エリオット『サイラス・マーナー』土井治訳（岩波文庫, 1989）, p. 88.
- 93) ①, ②ともに *Silas Marner* by George Eliot (Project Gutenberg, 1996) の e-text による。
- 94) ジョージ・エリオット『サイラス・マーナー』, p. 156.
- 95) 『ホビットの冒険（下）』瀬田貞二訳（岩波少年文庫, 1980）, p. 107.
- 96) J. R. R. Tolkien, *The Hobbit or There and Back Again* (HarperCollins Publishers, 2006), p. 264.
- 97) 『ホビットの冒険（下）』瀬田貞二訳, pp. 158-9.
- 98) J. R. R. Tolkien, *The Hobbit or There and Back Again*, p. 298.
- 99) Walt Whitman, *Leaves of Grass* (Airmont, 1965), p. 29.
- 100) 『ホイットマン詩集：草の葉（上）』鍋島能弘・酒本雅之訳（岩波文庫, 1973）, p. 70.
- 101) Walt Whitman, *Leaves of Grass*, p. 234.
- 102) 『ホイットマン詩集：草の葉（中）』鍋島能弘・酒本雅之訳（岩波文庫, 1974）, p. 332.
- 103) Walt Whitman, *Leaves of Grass*, p. 279.
- 104) 『ホイットマン詩集：草の葉（下）』鍋島能弘・酒本雅之訳（岩波文庫, 1974）, p. 76.
- 105) T. S. エリオット『四つの四重奏曲』森山泰夫注・訳（大修館書店, 1993）, p. 145.

- 106) 同上, p. 3.
- 107) 「荒地」深瀬基寛訳, 『エリオット全集 1』(中央公論社, 1979), p. 123.
- 108) 越沢浩『T. S. エリオットの『荒地』を読む』(勁草書房, 1992), p. 57.
- 109) 「マリナー」上田保訳, 『エリオット全集 1』, p. 183.
- 110) ‘Marina’ by T. S. Eliot (American Repertory Theatre, 2003) の e-text による。
- 111) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』, p. 638.
- 112) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 465.
- 113) Cf. Chandler S. Robbins, Bertel Bruun, and Herbert S. Zim, *A Guide to Field Identification ; Birds of North America* (Golden Press, 1966), p. 230. Cf. David Alderton, *The Complete Books of Birds* (Hermes House, 2002), pp. 232-3.
- 114) 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修, 成田成寿編集『英語歳時記』(研究社, 1997), pp. 166 参照。
- 115) Henry David Thoreau, *Walden, or Life in the Woods*, with Introduction and Notes by Kinsaku Shinoda (研究社, 1974), pp. 83-4.
- 116) 同上, p. 84.
- 117) 同上, p. 317.
- 118) Chandler S. Robbins, Bertel Bruun, and Herbert S. Zim, *A Guide to Field Identification ; Birds of North America*, p. 232.
- 119) 同上
- 120) 同上
- 121) 飯島吉晴「ぬえ」, 『世界大百科事典』; 『国語大辞典(新装版)』(Microsoft/Shogakukan Bookshelf, CD-ROM 版, 1988) 参照。
- 122) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑: 鳴き声 333 (下) スズメ目』, p. 94.
- 123) 樋口広芳「トラツグミ」, 『世界大百科事典』
- 124) 『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』76号, p. 6.
- 125) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑: 季語になる折々の鳥と虫 204 種』, p. 97.
- 126) 中村登流『野鳥ガイドブック: 村里へ高原へ山頂へ水辺へ』(光文社, 1979), p. 169.
- 127) 小林清之助『鳥の歳時記』, pp. 140-1.
- 128) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 2: 初夏の鳥』(小学館, 1984), p. 138.
- 129) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記 2: 初夏の鳥』(学習研究社, 1983), p. 133.
- 130) 倉野憲司校注『古事記』(岩波文庫, 2000), p. 49.
- 131) 太田善磨『古事記物語: 若い人への古典案内』(教養文庫, 1977), p. 53.
- 132) 『新潮日本古典集成: 萬葉集(3)』青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎校注(新潮社, 1999), p. 79.
- 133) 同上
- 134) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑: 鳴き声 333 (下) スズメ目』, p. 50.

- 135) 同上
- 136) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記2：初夏の鳥』, p. 132.
- 137) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204種』, p. 97.
- 138) 中西悟堂『定本野鳥歳時記2：野鳥のすみか』（春秋社, 1966）, p. 201.
- 139) 山本健吉『新俳句歳時記（二）夏の部』（光文社, 1956）, p. 44.
- 140) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記4：秋の鳥』（学習研究社, 1983）, p. 137.